学校の教室を二つ分ぶち抜きにしたくらいの間取りの会場。中央には長いテーブルが配置され、たくさんの料理が置かれている。会場にいる人々は、思い思いに料理を手元の皿に取って談笑している。

会場にいる人間は様々で、年齢にも服装にも統一感はない。パーティーのようだが、服装規定（ドレスコード）はないらしい。

やがて、会場奥の床より一段高くなった教壇のような場所に、一人の娘が現れた。高校生くらいの年代の少女で、なぜかメイド服を着ている。緩くウェーブのかかった銀色のセミロングの髪。ニュートラルな目つきの、金色の瞳。頭頂部には狐（きつね）を思わせる獣耳があり、腰の低い位置にも狐を思わせる尻尾（しっぽ）が生えている。

メイド服の少女は、静かな足取りで壇上の中央まで来ると、設置されていたマイクにスイッチを入れる。軽くマイクテストを行い、衆目が自分に集まったのを確認すると、良く通る声で話し始めた。

『――本日は会場にお集まりくださり、ありがとうございます。そして、文章でお読みくださっている読者の方々にも、厚く御礼申し上げます。今日、七月十五日をもちまして、『機獣少女ゾイカルやみひめ』は連載一周年を迎える事が出来ました。これも偏（ひとえ）に、お集まりの皆様と、読んでくださっている方々があってこそです。本当にありがとうございます。そもそも作品というのは……長いので私の一存で中略します』

無表情に話していたメイド服の少女が、一瞬だけ苛立ちを感じたように表情を変えたが、恐らく気付いた者はいないだろう。読んでいるのは誰かに用意された原稿のようで、手元のレポート用紙のようなものを二枚ほど捲（めく）り、発言を再開する。

『今宵（こよい）は本編はお休みして、特別企画をお送り致します。なお、この宴（うたげ）での内容は、閉幕の時点で皆様の記憶から抹消されます。本編に影響を及ぼす事もありませんので、一夜限りの夢だと思ってお楽しみください。最後になりましたが、私は宴の主催者代理の『司会のお姉さん』です。それ以上でも、それ以下でもありません。ご静聴、ありがとうございました』

それを締（し）めの言葉とし、メイド服の少女――司会のお姉さんは一礼した。

これは――一夜限りの宴。

『機獣少女ゾイカルやみひめ』特別企画、始まります。

幕間

『夢一夜(ゆめひとよ)』

『ゾイやみ』トピックス年表

２０１１年

やみ子、転入生のクラウと友達になる。（サイドストーリー／以下ＳＳ　＃04）

二年前（地球時間２０１２年）

ツバキ、〈機獣少女〉となる。（ＳＳ　＃02）

２０１４年　８月中旬

やみ子、アサトと出逢う。（第一話）

８月31日

やみ子、アサトと夏祭りに行く。（ＳＳ　＃01）

９月下旬　水曜日

ツバキ、〈カタストロ〉と共に地球に転移する。

◆本編スタート

９月下旬　金曜日

やみ子、放課後の公園でツバキと出会う。その後、ツバキを追って現れた〈カタストロ〉と遭遇。〈機獣少女〉に変身。（第一話）

〈カタストロ〉を退け、やみ子はツバキに協力を申し出る。（第二話）

やみ子、行く当てのないツバキを自宅に招く。（第二話）

９月下旬　土曜日

やみ子、ツバキから〈機獣少女〉や惑星ゼヘナの説明を受ける。（第二話）

9月下旬　日曜日

やみ子、ツバキの日用品を買うため、一緒に街へ出る。アサトも同行。（第四話）

やみ子、MBデバイスである〈カグツチ〉が過去の記憶を失っている事を知る。ツバキ、やみ子が住む地球に対し、並行世界の可能性を提示する。（第五話）

〈カグツチ〉、やみ子と対話。やみ子、対話中に『並行世界は誰かの夢ではないか』と提示する。（SS　#03）

9月下旬　月曜日

やみ子、週明けなので小学校に登校。（第六話）

やみ子、アサトと軽い喧嘩（けんか）。ツバキ、情報収集のため図書館へ。（第七話）

クラウ、放課後にやみ子と別れた後、不可思議な体験をする。（SS　#04）

訓練を兼ねた、夜の〈カタストロ〉対策開始。やみ子、ツバキと気まずくなる。（第八話）

9月下旬　火曜日

クラウ、学校を休む。やみ子、アサトと和解。ツバキ、〈カタストロ〉の端末と遭遇戦になる。やみ子、気まずくなっていたツバキとの距離を縮める。（第八話）

夜の〈カタストロ〉対策・二日目。やみ子、ツバキの深淵（しんえん）に触れる。（第九話）

9月下旬　水曜日

市内で女子大生が意識不明の状態で見つかる。クラウ、欠席二日目。（第九話）

ツバキ、アサトと商店街で出会い、プチデート。（SS　#05）

以後、第十話に続く

壇上に上がり、このパーティーの主催者代理らしいメイド服の少女――本人曰く『司会のお姉さん』――は挨拶を終えると、余興なのか、編集されたであろうここまでのダイジェスト映像を投影装置でスクリーンに映した。

「懐かしいね、くらう」

「そうだね。でも、三年前の自分を観るのは……ちょっと恥ずかしい」

序盤の映像を指して、そんな会話をする二人の少女。一人は小学生くらいに見えるが、もう一人は高校生くらいに見える。一見すると姉妹のようだが、この二人は同級生――正真正銘の小学六年生である。

平均的な小学六年生に見える少女は流遠やみひめ――通称・やみ子。長い黒髪をポニーテールにしており、少し吊り目な橙色の瞳と、年齢相応の朗らかな表情が特徴的だ。

高校生くらいに見える少女がクラウ・P・ブラン。フランス人の祖母を持つクォーター。長い黒髪の一部がメッシュを入れたように白いが、これは地毛である。容姿だけでなく、性格も大人びているため、小学生に見られない事をコンプレックスに感じている。

「――お二人の出会いには、こんなエピソードがあったんですね」

自分達の過去の映像について話す二人の会話に、もう一人、少女が加わった。セミロングの黒髪を左側で結んだサイドポニーにしており、ポニーテールのやみひめとも、下ろしているクラウとも違った個性を発揮している。

ツバキ・タカチホ。

惑星ゼヘナから来た異邦人で、地球では『高千穂ツバキ』と名乗っている。

特徴的な青い瞳は蒼玉のような穏やかな色を湛えており、穏やかな表情と相まって、クラウとは違った方向性で大人びた印象を感じさせる。

学年は二人より一つ下の小学五年生で、見た目は年齢相応だが、彼女は大きな秘密を隠している。着痩せする体質と、ゆったりとした服のコーディネートで隠しているが、小学五年生とは思えない豊満なバストを有するロリ巨乳なのだ。

「――ぶちのめしますよ？」

……そして、地の文にツッコミを入れる非常識――いや、規格外でもある。

「ツバキ、急に物騒な事言いだしたけど、どうしたの？」

「私、何か気に障るような言い方しちゃったかな……」

やみ子とクラウが、ツバキの不穏な発言に各々のリアクションを示す。どうやら、自分達に向けられた発言だと勘違いしたようだ。

「あ――いえ、お二人に言った訳ではありません。ちょっと電波を受信したというか……とにかく、気になさらないでください」

普段の澄まし顔を苦笑気味にし、ツバキが弁解する。それで納得してくれたのか、やみ子もクラウも、それ以上は訊(き)かないでくれた。

やがて、映像は次のエピソードに移っていた。ツバキが児童養護施設に入り、〈機獣少女〉になるまでの。

『――このシーンに関してはノーコメントで頼む。すでに過去の事だ』

やや重い沈黙が流れる会場で、〈カグツチ〉が機械音声(マシン・ヴォイス)で発言した。その口調は普段通りの時代がかったもので、別段、ツバキを気に掛けているようなニュアンスは感じられない。

そのまま、誰も発言する事なく、映像は次のエピソードに移った。

「〈カグツチ〉、私に気を遣ってくれなくていいんですよ？」

ツバキが自分の首にネックレスのように掛けられている待機状態のパートナー――MBデバイスである〈カグツチ〉に苦笑するような口調で言った。

『……別にそんなつもりはない。あの空気が気に食わなかっただけだ』

「そうなんですか？」

『そうだ』

憮然とした口調のパートナーの不器用な優しさに、ツバキは内心で笑った。

「そうですか」

『そうだと言っておろう』

「ふふ。〈カグツチ〉、やはり貴女(あなた)はツンデレです」

『……だから、その言葉の意味をちゃんと説明せよ』

からかうような口調のパートナーに、〈カグツチ〉は不満の声を上げるが、ツバキは取り合わない。ツンデレの意味を教える気はないようだ。

「二人は本当に仲が良いんだね」

ツバキと〈カグツチ〉のやり取りを聞いていたらしいクラウが、思わずといった様子で言った。

「はい。私達はパートナーですから」

「〈機獣少女〉とMBデバイスは一心同体なんだよね」

おどけた口調で答えるツバキに、やみ子も追従した。先ほどまでの微妙に張りつめた空気は、いつの間にか霧散していた。

「そもそも、こういう空気になるのは目に見えているんですから、主催者が気を遣って、私のエピソードはカットしてくれればいいんですよ」

ツバキがあらぬ方向を見て、ジトッとした目で言った。

……うん、ごめんなさい。

「あ、次は私とアサトの馴れ初めのシーンだよ」

映像は、痴漢に襲われたやみ子をアサトが助けるシーンに移っていた。

「橘さん、痴漢に一方的にやられてますね」

「でも、相手は大人だし、お巡りさんが来るまでの時間稼ぎだったんだよね」

ストレートな意見を口にするツバキと、フォローしようとするクラウ。同じ大人びた小学生でも、やはり物事に対するスタンスは違う。これはアサトとの交流時間の差もあるのかもしれない。

だが、そんな二人の言葉など聞こえていないようで、やみ子だけはうっとりとした表情をしている。自分を助けるためにがんばってくれている男の子というフィルターがかかっているためだろう。まったくもって、恋は盲目である。

●●●

会場の別の場所で、うっとりしているやみ子とは反対に、居心地の悪い気分を味わっている少年がいた。

橘アサトだ。

やみ子を助けた高校生。長めの黒髪と、気怠い雰囲気を除けば、比較的どこにでもいそうな高校三年生である。

「……死にたい」

『死んだ魚のような目』という慣用句があるが、今のアサトの目がそれだろう。少女を助ける英雄的行為だが、痴漢にやられている事に変わりはない訳だから無理もあるまい。アサトにしてみれば、英雄的行為そのものが恥ずかしいのかもしれないが。

「何を言ってるんだ、橘君。君の行動は素晴らしいものだ。もっと誇っていい」

そう言って掛け値なしにアサトの行動を支持するのは、彼よりもいくつか年上の青年だった。

神譲ハン。

やみ子とクラウのクラス担任――つまり、教師だ。と言っても、彼はまだ大学四回生で、現在は特別な制度を利用して、一年という長期の教育実習生をしている。

明らかに無気力な若者といった印象のアサトに対し、派手さこそないものの、ハンは質実剛健というか、どこか武士や侍といった印象がある。

「……どうでもいいんですが神譲先生」

「そこはかとなく棘があるように感じるが、なんだ？」
「君付け、やめてもらえませんか？　なんというか――気持ち悪いんで」
「……気持ち悪い」
アサトの言葉が地味にショックだったのか、ハンがやや気落ちしたような表情になる。良くも悪くも純粋な性格なのだろう。
「まあ、そう歳が離れている訳でもない同性からだと、気持ち悪いかもしれないな。なら、交換条件がある」
「何です？　金ならありませんよ」
「学生に金の無心なんてするか」
一応、ハンも学生なのだが、長期の教育実習という事で、手当として給料をもらっている身だ。
「敬語はやめてくれ。君の言い方を借りるなら――気持ち悪い」
初対面――夏祭りの時に会った際は、敬語は最初だけだった。だがそれは、紆余曲折があって余裕がなかったためで、こうして冷静に対峙すれば、年功序列が基本の日本人としては敬語になってしまう。それはアサトも例外ではない。
「判った。実は俺も、あんたに敬語を使ってると違和感があった。これも理由は判らんが」
「そうなのか？　不思議だな」
男性陣が不可解な違和感を感じていると、映像は次のエピソードに移っていた。
「お、あんたと初めて会った時だな」
「ああ。あの時は誤解して悪かったな」
「そういえば、俺の事を小学生に手を出すロリコン野郎みたいな目で見てくれたな」
「橘こそ、俺の事を教え子に手を出す淫行教師じゃないかって疑ってくれたな」
夏祭りの際、アサトはやみ子と一緒にいて、ハンはクラウと一緒だった。
「……せっかくのパーティーだ、過去の事を蒸し返すのはやめよう」
「……そうだな、お互いに誤解だった訳だし」
「ちなみに、クラウには本当に『親戚の子』以上の感情はないんですか、神譲先生？」
「はっはっは！　当たり前じゃないか、橘君？」
一触即発のピリピリとした空気が場を支配する。
そう簡単に過去の遺恨は消えない。頭では判っていても、人間は簡単には割り切れる生き物ではないのだ。
「……アサト、こんな場所で喧嘩しないでよ」
「……ハン、大人げない」

いつからいたのか、アサトとハンの近くに、件の二人の少女の姿があった。その表情は呆れ顔で、子供の喧嘩を宥める母親のようである。

少女であっても彼女等は『女』で、年長者であってもアサトとハンは『馬鹿な子供』なのだ。

男というのはどうしようもなく子供で、だから女が大人をやるしかない。

もっとも、女が大人をやって許すから、男が子供のままなんだという説もあるが。

「どうします？　大人げない喧嘩、続けますか？」

「……ツバキも来たのか。分が悪すぎるな」

やみ子とクラウに続き、ツバキも加わってしまえば、舌戦で男性陣に勝ち目はない。アサトは勝てない勝負はしない主義で、ハンに至っては教師だ。子供に大人げないと言われれば引き下がるしかない。

「良い子だね。よしよし」

「……やめろ。引っ張るな」

精一杯の背伸びをしてアサトの頭を撫でようとするが、やみ子の身長では当然、届くはずもない。なので、アサトを屈ませようと腕に抱きつくようにして引っ張っている。親に欲しいものをねだっている幼児のようだ。

「クラウはやらなくていいからな」

アサトとやみ子の様子を見ていたクラウの機先をハンが制した。彼女が何を考えているのか読めたのだろう。

それに対し、クラウは珍しく子供っぽい不満顔で訊ねた。

「……嫌？」

「嫌じゃないが……なんだ、そういうのはもっと相応しい相手にだな」

言葉に困るハン。なんだかんだで、やみ子がアサトに対してどういう感情を抱いているかは理解しているし、とやかく言うつもりはない。だが、クラウの感情には気付いていないのだろう。だからこそ、対抗意識のようなもので、やみ子のような行為をすべきではないと言いたいのだ。

「……朴念仁」

クラウのつぶやきは、ハンには聞き取れないような微かなものだった。これが今の彼女の精一杯だから。

「ん？」

「なんでもない。それより、あっちのテーブルの料理は食べた？　こっちのとメニューが違うんだよ」

案の定、聞こえていなかったのであろうハンのリアクションはあえて無視し、クラウは話題を変えて彼を誘った。「おい、流遠達(るとお)はいいのか？」というハンの問いに、「うん。たくさん話したから」と答え、クラウは少し強引に彼の手を引いていった。

「がんばってください、クラウさん」

その様子を横目で見ていたツバキは、クラウに小さくエールを送った。

「あれ、くらうは？」

「神譲先生と奥のテーブルに行きましたよ」

アサトの腕に抱き付くような格好のまま訊ねてきたやみ子に、ツバキが答える。

「そう。あ、それよりツバキ！」

「はい？」

「あれ、どういう事？」

やみ子が指すのは先ほどから流れているダイジェスト映像で、だいぶ先に進んでいたらしい。現在はサイドストーリー　＃05に当たるエピソードで、それはつまり――

「あー……」

ツバキが珍しく焦りの色を浮かべている。だが仕方がない。それはツバキがアサトとクレープを食べ、しかも、やみ子には秘密にしているエピソードである。

「どういう事！？　ダメ人間は守備範囲外だって言ってたのに！　しかも、クレープを一緒に食べるって……デートなの！？」

「やみ子、守備範囲外って何の話だ？」

「アサトは黙ってて！」

やみ子の剣幕に、アサトは言われるがまま口を噤(つぐ)んだ。

「ねえ、ツバキ！」

「えっとですね……」

今までにない迫力のやみ子に押され、さすがのツバキも口ごもる。思考が中断され、上手い言い訳も思いつかない。しかし、そこで妙案がツバキの頭に浮かんだ。それは――

「……てへ♪」

以前、やみ子がやったように自分の頭を小突き、舌をちょろっと出し、可愛い表情をしてみる。しかし、そこで思い出す。あの時、される側だった自分は、どういう感情を抱いただろうか。もし、やみ子が同じように感じていれば、きっと……。

「……やみひめさん？」

恐る恐るやみ子の表情を窺う。
そこにいたのは――笑顔の修羅だった。
きっと、あの時の自分もこんな顔をしていたのだろう。冷静に、そう思うツバキだった。

●
●
●

あれから、かつて自分がそうされたように、やみ子はツバキの頬を執拗につねった。殴られるような激しい痛みはないが、ゆっくりと地味に痛めつけられるというのは、精神的なダメージがある事を、やみ子は身をもって知っている。
「……ヒリヒリします」
自分の頬を擦りながら、ツバキが憔悴した表情で言う。
「それは私の心の痛みだよ！　私の心も、それくらい痛んだからね！　私もアサトとクレープ食べたい！」
やみ子は『アサトとの密会』に怒っているのではなく、単純にツバキを羨ましがっているようだ。友人を恨んだり出来ないのが、この少女の美徳と言えば美徳なのかもしれない。
「判った。今度はやみ子も一緒に食いに行こう。だから、もう機嫌直せ」
「本当に？　私も連れていってくれるの？」
疑心暗鬼になっているのか、やみ子は涙で瞳を潤ませ、不安げに上目遣いでアサトを見上げる。
「う……」
「口ごもった！　やっぱり嘘なんだ！」
アサトが口ごもったのは別に理由があるのだが、それを説明する訳にもいかず、アサトはどうしたものかと困り顔で思案する。
すると――
「橘さんは、やみひめさんの泣き顔と上目遣いが可愛くて照れているだけですよ」
と、ツバキに看破され、しかも暴露されてしまった。
「そうなの、アサト？」
「……」
「……違うの？」
「あー……そうだよ。ツバキの言った通りだよ」
観念して、アサトは肯定した。どうせ、この宴での事は忘れてしまうのだ。
だったら、別にやみ子を泣かせてもいい訳だが、それが出来ないのがアサトという少年

だった。

「そっか……えへへ、なら良いよ」

やみ子の表情は、悲しい泣き顔から、嬉し泣きに変わっていた。ほんのりと目の下が赤いのは、そういう事だろう。

アサトはそれを直視出来(でき)ず、少し乱暴にやみ子の頭を撫(な)でて下を向かせた。

「アサト、痛いよぉ」

抗議をしているつもりだろうが、やみ子の声には嫌がっている様子は微塵も感じられない。

そんな二人を眺めながら、ツバキは微笑ましい気持ちの中に、一抹のさびしさも感じていた。

「――お取り込み中に大変恐縮ではありますが」

微妙に甘ったるい空気を掻き消すように、第三者の声が割って入った。

『司会のお姉さん』こと、主催者代理のメイド服の少女である。なぜか、茶色の猫を胸に抱いている。

「あれ、その猫って」

その猫に、やみ子は見覚えがあった。以前、アサトに見せてもらった画像に写っていた、彼の飼い猫である。

「ベアトリーチェ？　なんで、あんたが？」

アサトも知らされていなかったらしい。自分の家の猫が、どうして初対面の少女に抱かれているのか判らず驚いている。

「出番が待ちきれないようなので連れてきました」

すると、ベアトリーチェはメイド服の少女の手を離れ、飼い主の胸に跳んだ。慌ててアサトが受け止めると、にゃ～、と嬉しそうに鳴き、甘えるように頬擦(ほおず)りをした。

「さて、本来であれば私も、小さい姉さんを可愛がったり、逆に甘えてみたりしたいところですが、今回は自粛するように強く言われているのでやめておきます。時間もない事ですし」

そう言ってメイド服の少女は、名残惜しそうにやみ子を見たが、当の本人は『姉さん』という言葉の意味が判らず疑問顔だ。

「そういう訳なので、そろそろこの宴もお開きの時間です。姉さん――もとい、やみ子さんとツバキさんには、締(し)めの言葉をお願いします」

「承りました。なんとなくですが、何を言えばいいのかは理解しています」
メイド服の少女の言葉を受け、ツバキはいまいち状況を把握出来ていないやみ子の手を取り、壇上に上がった。
「えっと……ツバキ、どうすればいいの？」
「とりあえず、こんな感じの事を言ってもらえれば」
打ち合わせを済ませ、やみ子とツバキが並ぶ。

これにて一夜限りの宴は閉幕。
『機獣少女ゾイカルやみひめ』特別企画、終わります。

END

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『ゾイやみ』一周年企画をお届け致します。

昨年の七月十五日にプロローグを掲載し、この幕間（まくあい）の掲載をもって、『ゾイやみ』は一周年を迎えます。当時は一年後の事など考えられない状況でしたので、こうして一年経ち、ほぼ月一更新出来ているのが奇跡のようです。奇跡も魔法もあるんですね。

本編がようやく終盤を迎えつつあるので、早く続きを書きたい気持ちもあるのですが、一周年だし何かやらねばと考え、こういう内容に落ち着きました。多少、『小説的にどうなの？』という事もやっていますが、今回は特別企画なので大目に見てください。

構想段階では、もうちょっと丁寧にここまでの流れを振り返るつもりだったのですが……さすがに無理だと、書き始めて早々に気付きました。なので、本編では出来ないであろうキャラ同士の掛け合いをメインにしてみました。

では、よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』と、チェックをしてくださった紙白さんに感謝を。ありがとうございます。

無事に完結させるために！　あと一息！　皆さんの力を私に貸していただきたい！　そして私は……誰のもとに召されればいいのでしょう？　すみません、『逆シャア』のシャアの演説のパロですが失敗しました。

ともかく、ここまでお付き合いくださり、本当にありがとうございます。読んでくださる方がいてこそ、創作は完成します。

２０１５／７／10　流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る